

塚本誠子展

SEIKO TSUKAMOTO EXHIBITION 2012

出品目録

花・鳥・風・月

2012年10月15日(月)～20日(土)

11:00～18:00(最終日17:00)

●

捧ぐ

紙本着彩 4号M

花束を頂くと、送り主の方の気持ちを思って嬉しく、この喜びを少しでも長く留めていたくて、絵にすることがよくある。
これは私から、作品を見て下さる方々への感謝の気持ちを込めた花束。そして同時に、悲しい出来事に遭遇した人々に捧げる、私からの献花。

●

蝶を纏う

紙本着彩 10号F

自宅で花を育て始めて以来、開いた花に蝶が会いに来るのを見るのが私のご褒美となった。人が花だとしたら、旅人の蝶には異国の話を尋ね、隣人の蝶には恋の相談でも打ち明けるのだろうか。美しく成長してくれた花に、とりどりの蝶の衣を着せてあげたい。

●

羽ばたきの朝

紙本着彩 10号F

美しい花束が枯れていくときも、その美しさはひとときわ。
みずみずしかった頃の思い出を大気に昇華させて、やがて色を失ってゆくが、傍らには新しい生命の羽ばたきの予感がある。

●

幽明 高麗山

紙本着彩 6号M

大磯丘陵の東端に位置する高麗山（こまやま）。その優しい山容は、東海道五十三次にも描かれている。麓に神社があるが、本社は山の中腹にあり、いまでも旧暦の3月に上社へ神輿に乗せた本尊を担ぎ上げる祭りが行われている。大磯丘陵は相模湾にある沖ノ山堆列の一部が陸上に顔を出したもの。30万年前に隆起を始めた大地は、今私達の目には不動の様にも見えるが、じつはゆるやかに生きていて、私たちには計れない深い呼吸をしているのだろう。

●

花に遊ぶ（3点）

和紙にシルクスクリーン 着彩 0号F

スクリーンに焼き付けた版に、アクリル系の絵の具で数枚プリントし、それを木パネルに水張りしてドウサ引きをし、日本画の絵具で彩色したもの。版があるおかげで、同じ素地にさまざまな色で楽しむことができる。

●

小鳥の時間

紙本着彩 8号変形

飼っていたカナリヤが、ある日籠からさっと飛び立って、まっすぐに窓ガラスにぶつかった。籠の中以外知らない鳥だったのに、光の方向を確実に捉えて窓の向こうを希求していたことを知り、胸を打たれた。冷たく静かな籠の中の世界で、一人きりの時間をふんだんに燃やしながら、いつか自分も大空を羽ばたくことがある日を想う、いとしい小さなうち。

●

夜明けの音

紙本着彩 0号S

太陽が昇る直前、人も街も動かず、鳥も虫さえも息をひそめる無音の時間がある。そうした時間にしばしば私は目を覚ましてしまう。
すべてがまるで薄い透明な翼を得たように空に消えてしまいそうな夢い時間は私は恐れ、また親密に感じる。

●

漂泊の途

紙本着彩 30号M

ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月の頃
奥吉野にある西行庵に旅したことがある。わずかに流れる清水を頼りとした寂しいところだったが、西行にはそこを自分の居場所とした。
この時代の中でどこでどのように生きてても、私たちはまるで茫茫漠漠の曠野のなかのこぼれる砂の粒の如く風に流れさせらう。
願わくは、私はどこでどうして死にたいのか。どのような生きる道をたどれば、どのようにまとうに生き抜き、死に行けるのか。
まだ道は遠いようでもあるし、すぐそこに永遠があるようでもある。

●

羽音～異国窓から

紙本着彩 6号F

幼稚園から一緒だった友人がヴァイオリニストとしてフランスに渡り、ナント市を拠点とする交響楽団の一員になった。彼女を訪ねていったとき、大きな窓を逆光にして練習曲を弾いてくれた彼女は真剣で、神々しくすらあった。努力を重ねて美しく飛翔する彼女の羽音を聴くようであった。

●

彼の音楽

紙本着彩 S M

同じ楽団のヴァイオリニスト同士で結婚した友人の夫は、優しい日本びいきの男性だった。
結婚は真面目な愛の形だと語る、真摯な彼の情熱は、彼の芸術をもばら色に彩るに違いない。

●

calm～静かに流れる

紙本着彩 3号F

東日本大震災のあと、しばらくは何も描くことができないまま日が流れた。calm（静か）という名の短い曲を、繰り返し繰り返し聴いていた。
数ヶ月後ようやく筆をとて仕上げたのは、水と木による心象風景だった。川面には、精霊を送る灯箱が流れる。

●

流転

紙本着彩 W S M

雨が降れば濁り、晴れが續けば乾く、永々と続く流れの中に、日々の祈りを託したい。
自然のままであることは何故こんなに美しいのだろう。私の生も骨も、いつかこんな風に洗われ、流され、堆積し、運ばれてゆけと願う。

●

空の休日

ポリエステル布 着彩 80号変形

ときどき浜辺に出て、波に遊ぶ親子連れや兄弟、釣り人らをスケッチなどする。多くのものを飲みこみ育む大きな海を前に、私には言葉がない。
大震災で被災せずともただ生きているだけで人は多く損なわれていく。亡くした思い出や、失った人を思う。
日がな一日、いつまでも波間に糸を垂らしている釣り人と私は同類。
釣果を期待してではなく、かすかな希望もあるならそこに釣り糸をたらさずにはいられない。描かずにはいられないのと同様に。
空が黄昏に染まる頃、現実と夢が入り乱れて行く。失ったもの、あるいは願っても手に入れられなかったものの姿が雲の間にしばし現れ、また隠れた。